

応 化 会 だ よ り

昭和 40 年 第 1 号

早稲田応用化学会発行

巻 頭 言

会の運営の安定化を

会 長 水 野 敏 行

此度肝付兼英君の後任として応化会々長に選出されましたが、元来応化会はもっと若い方々によって運営して頂くことが適切であると考えていましたので、卒業後すでに 40 数年を経た老骨が出る幕ではないと思っています。

しかし御引き受けする羽目になった以上何とか現時の要望に応えた運営とその基盤を作りあげて御役御免を申し上げる所存であります。応化会の会員は学生諸君を交え学校側かた大約 500 名、卒業生が約 2000 名、合計 2500 名であり、このうち戦後の卒業生は 1400 名で毎年 100 名前前後の方が卒業生会員となりますので、この構成内容を吟味して運営するのが適切であります。

その上本会の年収は 80 万円位で極めて小規模なものでありますから、これら会員の構成と年収とを見合った運営ということになります。如何にも難かしいことであり、残念な思ひが致します。会誌の発行にも僅かな広告収入にも依存せねばならない現状は多数有力な応化卒業の方々の御立場を考えて規模の拡大と効率運営の必要性をつくづく感ずるのであって、是非とも皆様の御理解と御後援とを御願い致す次第であります。

このような観点にもとづき現規約により会長、副会長と委員とによって構成される運営委員会の充実強化を計り、別記の通り御委嘱申し上げた次第です。もとより会員の皆様がそれぞれの位置に於て活躍されていることは常々敬服申し上げておりますが、今回の選考が東京在住と年齢層とに基いたことでありますから、御高含の上皆様にもこの上とも絶大の御後援を御願する次第です。

更に資金面に於て応化会基金を作り将来運営の安定化を計りたく、取敢へず私から応分の寄附金を積み立てておきました。又収入増の立場から皆様より出来る

だけ多くの特別会員の申込みを頂き度くこれ又御願申し上げます。勿論以上は方針であって会則その他重要事項については役員会の決定を待って実施し度いと存じます。

以上就任の御挨拶と致しますが、何卒平素の御懇情にすぎり、御支援と御指導頂き度重ねて御願申し上げます。

なお新会長 水野敏行氏は応用化学科の第 2 回（大正 12 年）の御卒業で次のように各方面でご活躍中の方であります。

電気化学工業株式会社	副社長
デンカ石油化学工業株式会社	社 長
東洋化学株式会社	社 長
東北電気製鉄株式会社	取締役
日ノ出化学株式会社	取締役
産業構造審議会臨時委員	
工業技術院協議会委員	
電気化学協会副会長	

◇ 昭和 40 年度役員及び評議員 ◇

前 会 長 武富 昇, 山本 研一, 肝付 兼英
会 長 水野 敏行
副 会 長 吉田 忠, 棚橋 幹一
監 事 荒木 一郎
庶務委員 長谷川 肇
会計委員 鈴木 晴男
編集委員 宇佐美昭次
名誉委員 富井 六造
評議員 (教 室)

武富 昇, 山口 栄一, 山本 研一, 石川 平七
○大坪 義雄, 村井 資長, ○吉田 忠, 篠原 功
○森田 義郎, 城塚 正, 加蔵 忠蔵, ○長谷川 肇
○鈴木 晴男, 藤井 修治, 宮崎 智雄, 佐藤 匡
○宇佐美昭次

(旧 制)

山沢 松男, 稲田勇太郎, 肝付 兼英, ○水野 敏行
色川 御胤, 桑原 光雄, 小川 政得, 中野 栄

坂田 誠, 芳賀 惣治, 鳥井 敬文, 荒木 一郎
 海野 景正, 高木暢太郎, 牧 親彦, 宮本 五郎
 神原 周, 栗田 茂晴, 照井 総治, 小寺 孝男
 若山 一彦, 田上 信, 平野 静夫, 青木恂次郎
 横山鹿之亮, 正住 弘, 堀米 耕平, 豊田 喜雄
 松島 喬, 伊藤 孝, 棚橋 幹一, 百武 寛
 飯島 義郎, 設楽 正雄, 大友 恒夫, 遠山 正三
 井上 勇, 安部 康雄, 岩崎 馨, 稲葉 康夫
 関根 吉郎, 細田喜六郎, 織田 宗光, 種村 哲哉
 石井 欣二, 荻原阿爾多, 太田 昭, 西脇 六郎
 清水 常一, 高島 幹, 田中 甫, 中曾根莊三
 宇津木淑夫, 大原 定夫, 片岡甲子夫, 高橋 栄二
 安達 安巳, 岡本 重晴, 伊藤 政勝, 有田 士郎
 上田 忠雄, 小林 謙三

(燃料)

保正 秀雄, 小田 五郎, 倉林 正弘, 小野裕二郎
 吉田 茂治, 北沢 清, 高宮 信夫, 若松 禄郎
 赤林 宏, 浦上 良文, 大鹿 隆男, 山田寅之助

(工 経)

野村 亮, 村松林太郎, 藤原 千尋, 岩城謙太郎
 犬塚 克巳, 安塚 久夫, 石館 達二, 飯島 貞一
 横溝 克巳, 池田 稔, 小野 三郎

(新 制)

・百目鬼 清, 東野 博樹, 田中 守, 本田 尚士
 木邑 隆保, 堀内 志郎, 三田 貞義, 田中 照浩
 田和 恭介, 宮本 隆雄, 豊倉 賢, 中川 文博
 柳沢 亘, 平田 影, 名手 孝之, 岡田 豊
 茅原 伸光, 湯上 進, 松山 喜昭, 内藤 正敏
 池内 晴彦, 井上征四郎, 林 辰雄, 斉藤 栄輔
 石上 尚希, 萬 肇, 田中 信之, 宮本 利雄

(大学院)

道口 正雄, 土田 英俊 〇印は運営委員

教室だより

教室のこのごろ

学科主任 吉 田 忠

新学期を迎えて気分を一新してなど思っている間にもう夏休みだ。先生方皆さん御変りもなく御元気で。山口先生も余程御元氣になられたらしく別項のような御便りを頂いた。卒論論文を除いて、学部学生関係は殆ど西大久保の新館に移転したので、戸塚の応用化学科にあるのは教員と大学院学生の研究室のみで、最近の9号館は比較的静かである。物価高に実験実習費の不足で昨年は全く閉口したが、実習費値上げなどの関係で本年は最悪期を脱して予算の編成も幾分は楽

になった。応用化学専攻大学院学生の在学者数は現在69名、これだけで我々が学んだ旧制時代の応化学生数に近いが、更に学部学生は総数約470名であるから、応用化学科だけでちょっとした学校である。学部1年生の授業は一般教養科目だけで、学生達の不満も多いので、本年度から学修指導と呼んで応化の先生方が代る代る、毎週2時間位顔見せを行っている。最近のカリキュラムによると、理工学部の学生達は入学当時から余暇が殆どなく相当に論議があるようだ。マーチャンの時間は別としても、静かな思索反省、専門外の読書などに必要な余暇が少な過ぎるという訳である。

次に、昨年度と大した相違もなく花々しく始った就職戦線だが、不況の波は都の西北にも押寄せて、蓋をあけて見ると各社共に拒否試験の感深く、変らぬものは申込みだけという有様に頭が痛い。引張りだてで就職に困らなかった時代の卒業生は比較的伸びていない………といって学生達を励ましている。明春卒業予定者80名の中大学院進学者を除いて就職希望者は50名位で比較的少いから、何とか片附くとは思うが、学級担任の加藤、長谷川の両先生の御苦勞は大変である。

平静に見える教室にも問題は少くなく、内憂外患こもごもという現状である。試練のない処、発展も期待できない。卒業生諸兄の御支援のもと、教室一同まなじりを決して難関を突破して行きたい。

◇ 研究室近況 ◇

研究テーマを中心に

武富, 宇佐美研究室

発酵および食料化学に関する研究で、とくに微生物の代謝生産物の研究を行っている。すなわち有機酸発酵としては糸状菌を利用するクエン酸発酵について一連の研究を行い、その成果は学会誌に多数発表している。酵素としては酸性プロテアーゼをはじめ、最近新しい用途が開拓されつつあるセルラーゼについても研究を行っている。また新しい手法をとり入れて吸着剤表面における酵素の作用機作を検討し、酵素反応の諸現象に対する考え方に新機軸を出すべく研究中である。また昨年来、発酵原料の対象として炭化水素(灯油そのほか)の利用についても研究をはじめている。

山本, 森田研究室

1. 石油のガス化 都市ガス, 水素, 合成ガス等の製造を目的とするもので、部分酸化, 水素化分解, CO 変成等の研究をしている。

2. 炭化水素の接触異性化 鎖状炭化水素, 6員環炭化水素, 5員環炭化水素の相互の異性化の研究を行うもので、原料には $C_4 \sim C_6$ 炭化水素を使用してい

る。

3. 炭化水素の酸化および酸化脱水素 最近注目されている接触酸化脱水素, 新触媒のピスマス, モリブデン系触媒による炭化水素の酸化, 石油類, CO , H_2 の接触燃焼等の研究をしている。

石川研究室

化学工学のうち機械的操作を担当し, 現在主として膠質土の粉体工学に関し研究中である。なおその概要をテーマにより示せば次の如くである。1) 粉体の物性に関する基礎と応用。2) 粉体の機械的脱水法と成型化法。3) 粉体の表面活性とその応用。4) 膠質土よりアルミナおよびシリカの抽出と利用。5) 産業公害防止法に対する膠質土の利用。6) 濾過理論とその応用。7) 膠質土より多孔性断熱耐火物の製造法。

大坪研究室

X線的, 熱的, 光学的方法を使用する多結晶体, 特に相転移に重点をおいて研究を行っている。現在研究の対象としている主な物質は, セラミックス材料, 電子材料, 触媒などに関係するもので, 各種珪酸塩, $\text{M}_2\text{O}-\text{MO}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{V}_2\text{O}_5$ 系化合物, $\text{MI}-\text{AgI}-\text{CuI}-\text{CdI}_2-\text{HgI}_2$ 系化合物などである。また島津製作所と共同で自記示差熱分析 (DTA) 装置の研究を行っている。

吉田研究室

電気二重層および電極反応論など物理化学的研究を通じて, 燃料電池, 電解合成, 金属の腐食および防食あるいは工業電解など応用方面の開発に進む事を目標としている。その概要をテーマにより示せば次の通りである。1) 銅多結晶面へ電解質界面の電気化学的性状。2) 銅多結晶面の水素過電圧。3) 金属多結晶面の微視的および巨視的粗度について。4) ニッケル浴主要添加剤の界面挙動。5) チオ尿素系防食剤の基礎的研究。6) 水溶性高分子化合物の界面挙動。

篠原研究室

現在オリゴマーの研究に主力を置いている。オリゴマーを高分子と低分子の中間領域に対する名称として用いているが, 研究目的は谷間になったこの領域を学問的にも応用的にも確立させたいと云うことである。オリゴスチレン, オリゴ塩ビ, オリゴアクリロニトリル, オリゴ M. M. A. などについて合成, 物性の研究を展開しており, コオリゴメリゼーション, 静電現象などについて興味ある結果が得られつつある。

城塚研究室

研究テーマを大きく分けると次の4つに分類される。

1. 移動速度論 全ての装置内現象の最も基礎となる移動速度の問題を取り上げている。

2. 単位操作装置工学 主として抽出装置, 晶出装置の工学を研究しており, 従来困難とされていた晶出装置のスケールアップ法, 実装置設計法が最近確立された。

3. 反応工学 プラズマ反応器, 衝撃波管を使用し, 超高温反応のメカニズムと工業反応速度論的解析を行っており, そのほか冷焰反応器, 液相酸化反応器も取り上げている。

4. 動特性解析 特に抽出装置についてその最適制御への適用を計かっている。

加藤研究室

研究テーマはガラス関係と粘土関係の二つに大別される。

A ガラス関係 1) $\text{SiO}_2-\text{B}_2\text{O}_3-\text{Na}_2\text{O}$ 系ガラスの基礎研究。2) $20\sim 200\text{ \AA}$ の細孔を有するシュランク・ガラスのモレキュラー・シーブとしての利用, 3) シュランク・ガラスと無機化合物との反応, この中には発熱ガラスの製造研究が含まれる。4) シュランク・ガラス中に合成樹脂を重合せしめた半有機ガラスの製造研究

B 粘土関係 1) モンモリロナイト, ハロイサイト, ゼオライトのモレキュラー・シーブとしての利用。2) 粘土鉱物の有機誘導体の製造研究

長谷川研究室

近年触媒作用の研究には, 各種の分析機器が用いられる様になり, 特に分光学的な研究が盛んになっている。当研究室では, 次の様なテーマで研究を進めている。

1. 白土の呈色反応に於ける分光学的研究。カチオンラジカルの生成の確認とその挙動。
2. シス〜トランス異性化反応に於ける, 白土, シリカアルミナ系触媒の活性点の問題。
3. 有機反応に於ける触媒として白土の利用。

藤井研究室

十数年来石炭の化学構造に関する研究を, 高圧水素分解, 空気酸化, 試薬による酸化などの化学的方法ならびに赤外および紫外スペクトルなどの物理的方法を組合せて研究を行ってきた。最近では石炭技研, 資技試などと共同研究を行い, 同一石炭試料を用い, 各研究室でそれぞれ得意な物性の測定を行い, これらの多くの物性を総合して石炭の構造を論じている。そのため当研究室では新たに Helium density の測定, 分子蒸溜などの研究方法を加えた。

これと並行して新しいテーマとして有機反応を取上げている。既に高圧流通法による芳香族化合物の脱アルキル反応を行った。今年は特に芳香族カルボン酸の

カルボキシル基の生成、移動、脱離に関する研究に重点を置いている。

鈴木研究室

研究分野はデンブン化学である。その中で現在は主としてデンブン誘導体に関する研究（各種誘導体の製造条件と製品の諸性質との間の関係を調べる）を行っている。デンブン分子に、加水分解、酸化、置換などの化学的処理を行ってその性質を改変し、食品添加物、各種糊料などとしてすぐれた性質をもつものをつくり出すことによって、安価な天然高分子物質であるデンブンの用途を開拓することを主目的とするものである。

宮崎研究室

有機 π 電子系化合物の電子状態に対する分子軌道法に基づく計算結果は、その化合物の物理的・化学的諸性質を解析する上に役立つ数値である。しかしこの計算は非常に労力を必要とするのでデジタル計算機を使用することが望ましい。当研究室では最近、上記計算にひろく利用できる一般的なプログラムをつくることを目的としている。プログラムの内容は半経験的 A. S. M. O—S. C. F 法にしたがい有機電子系化合物の分子軌道、軌道エネルギーを算出し、その結果より π 電子密度、 π 結合次数、原子間距離を求め、さらに電子配置間相互作用を考慮して電子の励起エネルギーを求めるものである。又上記プログラムの外に Hückel M. O—S. C. F 法によるプログラムもできているので外部の方の計算の要求に応ずることもできる。

佐藤研究室

複雑な構造をもつ有機化学物の熱分解は古くから行なわれている方法であるが、一般に反応は複雑で多くの場合重合してタール状物質を副生する。われわれは分解すべき物質をキャリアー・ガスで稀めて、分圧を 10^{-3} mm Hg 位にし 800°C 付近で短時間 (0.1~0.3 秒) 分解することにより分解がスムーズに行われることを見出した。このようにして得た分解物をガスクロで分離し、各溜分の構造を紫外、赤外、核磁気共鳴、質量スペクトルを組合せて決定している。

なお村井先生は大学の常任理事としてご活躍中であり、また山口先生は御自宅で御静養中であるが次のようなお便りをいただいた。

生活復帰の途上から

山口 栄一

昭和37年の秋も深まった一日、診療所の検診で保健上注意を必要とすることが判り、勤務も心ならず休み

がちになり、ついに昨年6月長期欠勤を願い出で自宅で静養を致していましたが、おかげ様で大分快方に向っております。

もし許されたならば9月から出勤致し水素添加触媒の原料としての水酸化銅ニッケル複合物の電解的製造に関する実験を続けたいと思います。

会員の声

大学と卒業生

浅野スレート 荒木 一郎

大学を卒業し浅野セメント会社に入社、石綿スレート生産、研究部門に勤務して約40年、此間外国の事情は文献を通じて大体知っては居たが、石綿スレートが創製され世界的に大きく発展した西欧と最近世界最大の生産量と其優秀な研究を誇る東欧ソ連の実際を見たのと兼ねて思っ居た所幸いソ連が数年前開放外交に転換した際、ソ連とヨーロッパに行つて見る事になった。東欧西欧に全く関連を持たない私は、此時早大応化会の方々が到れり尽せりの御配慮をして下さり私は予定通りソ連に1ヵ月西欧に1ヵ月快よい外遊が出来たことは応化会の方々に最大の感謝の念を捧げると共に応化会は学術の研究切磋琢磨の場以外に交友親睦の場として大きな意義があることを痛感した。ソ連に入り先づ見たのは鉄道大学と農業大学であった。其環境の良さと整然とした設備に驚いただけでなく、ソ連の大学は実業と密接な関連を持ち、協力、指導と基礎研究とが実業に基礎を置いて開発されて居ることであり、日本で云う産学協同が根深く徹底して綜合化されて居ることであった。私共の早大応用化学会は二千を越える会員を持ち、今後益々卒業生数の増大することを考える時、早大応用化学会を通じ教授と卒業生とが一体化的に緊密に結ばれ、縦横のつながりを持ち互に協力し親睦を篤くすることは産学協同の基盤をつくることにもなり、大学にも卒業生にも益する所が大きいと考えられる。早稲田応用化学会の社会的意義と使命とが益々拡大されて行くことと思うので、大学と卒業生と云う題名で会員の声として一筆しました。

温故而知新

東京写真大学 宮本 五郎

編集委員から突然連絡があつて「応化会だより」が新しく発行されるので何か書けということである。急なことであり、文筆も立たない私なのでどうかとは思つたが、親睦の意味でということなので、当を得な

ていると思われる。

現在の石油技術の華として流動接触分解法（FCC）が世界に広く用いられている。これはフードリー氏の研究から端を発し、戦時中、米国政府の国をあげての化学工学的研究によって完成された技術であって、軽油から高オクタン価ガソリンを製造する装置である。

このことは小林久平先生が世界でも最初に研究されたことであることを知る人が少ない。私が学生の頃だから33年前位であろう。小林研究室で磁製の反応管に酸性白土を詰めてこれに軽油を通して分解実験が行われていた。余談だが私は魚油を活性白土で（山本先生は魚油と酸性白土）石油を作る卒業論文実験をしていた。この酸性白土による石油の分解は研究されたまま実を結ばなかった。その後フードリーの酸性白土による石油分解法が固定床式から流動触媒にまで発展し触媒も合成の珪酸アルミナとなって現在の FCC に発達した。

FCC から製出されるガソリンは熱分解法によるものよりジェン類が少く、従って安定で、オクタン価が高いので石油分解法と云えば FCC という位に風びしている。この反応機構は熱分解法がラジカル反応であるのに対し、 $\text{SiO}_2\text{Al}_2\text{O}_3$ という固定酸として分解反応と云われている。酸性白土の酸性を発見された小林先生の説が反応機構の解明にも生かされたこととなるだろう。

先生の研究が時代よりも（当時は熱分解全盛）早すぎたとも思われるが、それを工業化する技術は日本にはなかったと思う。今でも流動接触分解を完成する位の技術力は日本にはあるであろうか。私は工学部の真の活躍舞台はこのような研究を工業化する所にあると思う。

新制第一回卒業生として

大平化成 百目鬼 清

私共が昭和21年に第一早稲田高等学院に入学した時は旧制の学部を卒業する予定でしたが、高等学院3年を修了した時に急に一年早く新制度に移行しましたので私共は新制の第3学年から出発致した次第です。早稲田に入学した頃の事を想い出しますと、1年生の大半が復員学生（其の多くは軍関係の学校に在学していた者）が多く、確かに上級の方々よりも平均年齢は上であったかと思われます。高等学院1年の時倫理で大隈精神に就いての講義があった事を覚えて居りましたが何か素直について行けなかった様に記憶して居ります。学部に移行されてからの学習も、何分共旧制新制両制度の学生が同時に卒業する渡期で御座居ましたの

で、卒論等も何か継子の様な僻も無いわけではありませんでした。然し私共が一番最近になって感じます事は、パイオニアの自負と申しましょうか、在野精神と云いましょうか、此の間に培われた何かが現在生きている様に感じるのです。私共の卒業は昭和26年で未だ未だ日本の産業界は混迷を続けて居りまして、加うるに両制度の卒業生です。新制度の卒業生など受け入れられる様な雰囲気等全然ありませんでした（国立大学は未だ旧制度が存続していた）。然し当時を省みまして私共の周囲に居りました諸君は就職を心配する事より寧ろ敗戦後の学生生活を曲りなりにも送る事が出来たと云う喜びの方が大きかったのでしょうか、少々障ない方かも知れませんが、戦争と云う経験を持った者が多かったせいか真理の探求に没頭出来た喜びの方が大きかった様に思われます。

実は編集の方より何か面白い想い出話でもとの御要望でしたが、最近の経済界の事を見まして、何か私共の卒業の時と少々似ている様な気が致しまして、在学している諸君の事を考え何か一言云い度くなって以上様な事を書いてしまいました。

“天は自ら助くる者を助く”

在学の諸君大いに健闘して下さい。

最後に新制第一回卒業の諸君に申し上げます。夫々の立場で現在中堅として毎日御忙しい事と存じます。卒業して15年1度しかクラス会を致して居りません。誠に申し訳ない。以上の様な我身を省みない事を書きましてクスクス御笑の方も居られると存じます。御許し下さい。

◇ う ご き ◇

十化会（昭和5年卒業）近況 第10回卒業の同窓生が応化を卒業してから、本年で満35年が過ぎたのである。当時は19名であったが先月なくなられた浦川倍蔵君を数えると5名が既に他界され、現存者14名となって誠にさびしい。丁度5年前熱海の健保寮で武富、山本、山口の3大先生を御招きして卒業30周年祝賀会をやったとき、この次の40周年迄は生きぬくんだぞと申し合えたことがあったが、5年後の今日浦川兄を失なったことは本当に感無量である。浦川兄は卒業と共に同窓生の羨望の的であった、というのは彼は卒業と共に直ちに日本電線に入社されたのであって、当時卒業と共に就職があることは夢の様な話であったからである。その後鶴見グリース、昭和石油に勤められ、最後に現在の日本グリースの工場長として迎えられた。この間多くの研究業績もあり、特に昭和石油では研究所勤務がながかったのも、会社に対しては特に多くの

貢献がなされたと思う。58年の生涯は必ずしも長いとは云えないが、既に3人の男の子供さんも夫々一人前に成長されたし、現在の仕事を快的に楽しくやって居ったものと思う。従って有意義な生涯であったということができると思う。心から君の冥福を祈ってやまないものである。

(石川)

応化生のページ

'65 応 化 展

テーマ “公 害”

化学工業における公害は
いかに解決すべきか

応化展実行委員長 3年 松沢浩一郎

高村光太郎の詩集「智恵子抄」の中に

智恵子は東京には空がないといふ

この一節から始まる「あどけない話」がある。産業公害などおよそ縁のなかった昭和3年の作である。その頃の空は今よりずっと澄んだきれいな空だったであろう。その時でさえ、清純な環境に育った智恵子は、東京には空がない、ほんとの空が見たいと嘆いたのである。ゼンソク患者が多数発生し、黄色のマスクをかけたまま登校し、授業を受け、遊ぶ小学生がわれわれのすぐ近くにいる現在、東京に空がないと嘆く人は意外に少ないのである。大気汚染により毎日自分の身体がむしばまれていくのを知っている人は少ない。環境に慣れてしまうと、多数の患者か、死者が出ないかぎり公害の恐しさを感じなくなってしまうのである。

公害は東京にかぎらず、日本いたるところ、否世界各国で発生し、市民生活をおびやかしている。公害の中でも特に「化学工業における産業公害」に非常に大きな位置を占めている。

将来化学技術者として、化学工業に従事する我々は産業公害は是非とも解決すべき問題であることを認識し、また化学技術者であるまえに、社会を構成する一員である事を自覚し、科学の進歩と産業育成の“落とし子”すなわち産業公害をテーマに設定した。

今年度の理工展統一テーマは

戦争・災害と科学技術危機の時代に我々の行動である。物騒な言葉が用いられているが、要するに、科学技術の進歩により生じた矛盾を追究することを目的としている。我々としては非常にアプローチし易い統一テーマである。

我々はテーマを展開するにあたり、廃液部、廃ガス部、公害の諸社会問題部の三部に大別した。廃液部はさらに工業種別に、電気メッキ工業班、繊維・紙・パ

ルブ班、石油化学班にわけ、現在行われている製造過程とそれから起る公害、現在行われている処理方法と新しい処理方法、経済的回収法と有害成分を含まない製造過程とを展開する。また汚水処理場をなやましている中性洗剤の泡の問題を研究する泡班も加えた。廃ガス部は、ゼンソクの原因をなしている亜硫酸ガスと自動車の廃棄ガスの二点にしばり展開する。公害の諸社会問題部は、公害の人体及び人間性への影響、公害に関する法律の規制及びその検討、国家及び地方自治体の公害に対する政策、企業の良心とマイナス投資、住民の自覚及び公害防止運動の五項目を、化学的立場からだけでなく、あらゆる方面から公害問題を研究する。又代表地区として板橋区をとりあげ、アンケートや水質検査を行ない実体を調査する予定である。

例年がない、応化の学生としてとらえにくいテーマであり、我々学生がやること故、大きな成果は望めないかもしれない。しかし、持前の若さと、自由と、ファイトで公害問題を徹底的に追究したい。又、現在一年生のクラスは11学科混合でクラス編成され、応化生としてまとまるものは週に一時限、ガイダンス(学修指導)の時間だけである。そのために、お互いを知らず又二年になっても応化クラス意識が非常にとぼしく、まとまりがない。そこで応化展を縦のつながりばかりでなく、横のつながりを作る場として大いに利用したいと考えている。今後応化展をすすめていくにあたり、いろいろな問題にぶつかると思われますが、その際は先生方をはじめ諸先輩のよろしき御指導の下に応化展成功へと努力したいと思っております。

会 務 報 告

◇ 庶 務 ◇

昭和 39 年度

1. 会員数: 2671 名 内訳, 正会員 2201 名, 有志会員 23 名, 学生会員 447 名
2. 役員会: 5月28日, 大隈会館に於て庶務, 編集, 会計報告
3. 常 会: 5月28日, 大隈会館に於て宇佐美昭次講師(現助教授)の「クエン酸発酵について」の講演
11月4日, 日本工業倶楽部に於て池田亀三郎氏(三菱油化社長)の「無題」の講演
4. 新入生歓迎会: 5月7日, 理工学部西大久保校舎地下食堂に於て催された。
5. 球技大会: 7月5日, 西大久保校舎グラウンド
6. 早稲田祭参加: 11月18日~23日, 応化展を開催
7. 卒業生送別会: 40年2月16日, 大隈会館

8. 小林基質研究費：石川平七教授
9. 小林賞：40年3月の卒業生より酒井、大竹両君に授与された。

10. 会誌発行：39年9月、77号（宇野先生追悼号）2700部

11. 名簿発行：40年3月、2000部

昭和40年度

1. 役員会及び常会：5月24日、大隈会館に於て開催された。本年は役員改選の時期にあたり、当日役員会に於て会長に水野敏行氏が選出され、続いて副会長、委員、評議員が別掲の如く決定された。応用化学会創立50周年を来年に控えて新会長のもと次々と新方針が打ち出され、応用化学会の今後の発展が期待される。これに伴い、肝付兼英氏、稲田勇太郎氏、色川御胤氏が退任された。三氏は応化会発展のために誠心その任にあたられた。今後とも御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

2. 運営委員会：6月17日、別掲のごとき新委員の初会合を開き、次の通り運営方針を明らかにした。

1) 会誌の発行 応用化学会報は年一回とし、新たに「応化会だより」を年二回以上発行する。

2) 会合 春秋大会は総会とし、秋季大会は講演会とする。この他見学会、懇親会、学生会員のための講演会などを計画する。

3) 運営資金 会長より当会運営の安定化のために基金をつくりたいとの発言があった。この案として、第一に、有志より3年間年賦として年約300万円を集める。第二に、特別会員（団体または会社）をふやしたまたこれに個人を含ませる、などが提起された。

3. 会員数：2814名 内訳、正会員2311名、有志会員21名、学生会員482名

4. 新入生歓迎会：4月28日、理工学部西大久保校舎地下食堂に於て催された。

収 支 決 算 表

(自 昭和39年4月1日
至 昭和40年3月31日)

収 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	41,806	会 報 費	462,350
正有志会員会費	421,900	名 簿 費	166,060
学生会員会費	138,300	集 会 費	39,042
広 告 料 金	256,500	学 生 部 会 費	66,900
利 息	28,939	集 金 費	47,890
雑 収 入	6,500	支 部 費	10,000
		用 品 費	8,935
		事 務 費	45,500
		雑 費	5,503
		次期繰越金	41,765
	893,945		893,945

紙面の都合により昭和40年度予算表は次号に掲載する。

会費領収書についてのお知らせ

振替貯金で会費を御納入下された場合、従来は当方より領収書をお送り致しておりましたが、経費の節約と事務の簡素化とを計り度く存じますので、お払込みの際に郵便局より交付されます領収書をもってそれに替えさせていただきます度くお願い少々御通知申し上げます。なお昭和40年9月1日より実施させていただきますが、現金でお払込みの場合および振替でも特にお申出があった場合は従来通りの領収書を発行致します。名簿代金につきましては現金、振替をとわず、お申出がない限り領収書は発行致しません。

◇ 編 集 ◇

このたび庶務報告のなかにもありましたように「応化会だより」を発行することになりました。これは会員の親睦をはかることを目的として、学内の活動、卒業生の消息、意見および情報の交替、業界のトピックス等々を内容としたもので、年二回の発行を予定しております。会員の方々からの御投稿を歓迎いたします。

◇ 会 計 ◇

貸 借 対 照 表

(昭和40年3月31日)

借 方		貸 方	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
現 金	397	前納会費積立金	434,500
振 替 貯 金	2,197	名簿刊行積立金	300,000
普 通 預 金	444,221	次期繰越金	41,765
定 期 預 金	300,000		
郵 便 貯 金	29,450		
	776,265		776,265

昭和40年8月1日 発行

発行人 早稲田応用化学会
編集人 宇佐美 昭次
印刷所 早稲田大学印刷所